論　文

「民族服」と「国服」、期待と奮起
― 21 世紀中国人の服装意識変化の研究

山内　智恵美（大東文化大学外国語学部）

"Folk clothes" and "National clothes": expectations and inspirations
― A study on changes of Chinese consciousness about clothing in the 21st century

Chiemi YAMAUCHI

1. 問題の提起

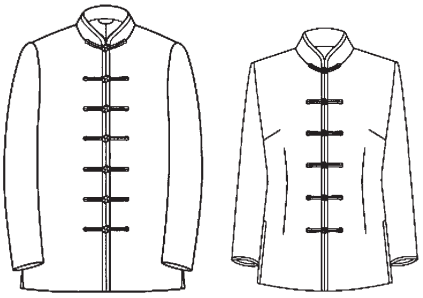
1644 年、明王朝の滅亡に伴い、漢民族の服制・礼制が排除された。約 260 年後の 1911 年、帝政が覆され、中華民国政府は、新たな服制を定めた。この時期から、欧米文化が大量に中国になだれ込む。1966 年「文化大革命」が勃発し、古い文化や伝統は更なる打撃をこうむった。これら度重なる「文化地震」に見舞われたことで、文化的断層が形成され、漢民族の民族服は、ほぼ息絶えることになる。民族の伝統服が消滅するという事実を目の前にし、多くの人は、覆すことが不可能な歴史的変化としてこの事実を受け入れた。

誰も想像すらできなかったことであるが、1990 年代初頭、中国の服飾学界に、数年に亘る論争が勃発する。論争のテーマは、「現代漢民族に民族服はあるのか」であり、肯定、否定派双方が存在した。論争の内容は省略するが、結果として、肯定派、否定派両者の引き分けとなった。筆者はこの時、中国の更なる改革開放により、服飾文化の西洋化が一層進み、中山服派、旗袍派が次第に勢力を失っていくと推測した。だが、自体は逆に進み、民族服肯定派の勢力が徐々に強くなり、より多くの大衆の共感を得るようになった。大衆という最強の支持を得たことにより、民族服を新たに制作･復興し、民族服に「民族性」という表現と意識を固定化しようとする動きは、次第に活発化する。

本論では、2001 年以降のこれらの動きと原因、「民族服」「国服」への期待と民族服の衰退を挽回するための奮起､更にそれらの効果を検証し､一連の動きの裏にある服飾意識の変化を捉えていく。

先行研究については、21 世紀に入り、中国大陸では、現代服飾史に関する研究が盛んになった。代表的なものとして、華梅『中国近現代服装史』（2008）、袁仄・胡月『百年衣装』（2010）などが

ある。また中山服、旗袍、唐服など個々の服飾史を中心とした研究が多数ある。だが筆者のような、21 世紀の民族服の復興、再生、創造に対する服飾意識の変化に注目し、その意義を分析する試みは見いだせていない。



A 男式　　B 女式

2. 期待通りのデザイン

2001 年 10 月 21 日、上海でアジア太平洋経済協力会議（APEC）首脳会議が開催された。この時、首脳たちはホスト国中国より贈られた「唐服」を身につけた。男性首脳たちは、図 A を、女性首脳たちは、図 B を着用した。この時の首脳たちの集合写真は、「新唐服」[1] お披露目の場となった。APEC のホスト国が各国と地域（エコノミー）の首脳たちに自国の民族服を贈り、写真を撮るのは、一種の余興である。ホスト国（日本を含む）が民族服を贈らなかった時、首脳たちはスーツ類を着用して写真を撮った。中国は 1991 年 APEC に加入し、2001 年初めてホスト国を務めた。おもてなしを重視する中国人にとって、自国の民族服を贈らないと面子が立たない。このため何か特色ある服装を用意しなければならなくなったが、男性首脳に中山服、女性首脳には旗袍を贈るという案が否定された。このことから、中国政府外交部礼賓司の官僚と顧問学者たちが、中山服と旗袍では、民族性が足りず、「民族服」としての役目を担う資格がない、と判断したことがわかる。民族としての特色が明快な衣装を用意しなければならないのであれば、選択肢は只 1 つ、漢民族の特徴を持つ新しい服装をデザインするしかない。外交部はこの件を非常に重視し、アパレル業界間で競争させることとした。予選には 10 数社が参加し、4 社が本選に進んだ。この 4 社から 2 パターンずつデザイン案、計 8 パターンが礼賓司に渡り、礼賓司が選んだのが首脳たちに贈られた対襟中式の上着、「新唐服」である。

新唐服自体は本来会議の余興に過ぎなかった。だが、当時の中国人は、江沢民、ブッシュ、プーチンたちが様々な色の新唐服を一同に着用する姿をみて、非常に興奮した。特にメディアは、大きく騒ぎ立て、精一杯褒めたたえた。当時、各テレビ局は、すぐさま開幕式の状況を放映した。翌日の『人民日報』には、一面で集合写真が掲載された。同時に第 5 版では、「領導人穿上対襟夾装」をタイトルとした以下の記事が掲載された。

> 今回中国側が特製した上着は、濃厚な民族の特色を持つ、赤、緑、青、茶色、暗紅 5 種の色があり、生地は織錦緞で、上着の裏にあてる生地には「APEC」という文字が織り込まれた。[2]

---

[1] 中国語の原名は「唐装」で、日本語の直訳は「唐服」である。「唐服」には、唐代の衣装という意味もある。誤解を避けるために、ここでは「新唐服」と称す。詳細は、拙著『現代中国服飾とイデオロギー』口絵第Ⅲ頁と第 112 ～ 113 頁。

[2] 康燕「領導人穿上対襟夾装」。「人民日報」2001 年 10 月 22 日第 5 版。

その後 110 日が過ぎ、2002 年の春節を迎える。新唐服は数億着を販売し、大勢の中国人が新唐服を着用して春節を過ごした。この時、誰もが予想していなかったことが起こった。僅か 3 ヶ月で、新唐服のブームが巻き起こったのである。翌年上海外事弁公室の官僚は、「APEC 首脳たちにデザインした服装は成功を収め、同時に国内外で瞬く間に唐服熱が巻き起こった。」[3] と当時を振り返り、APEC 新唐服デザイナーの 1 人は、「この時代の華服――盛世の新唐服が誕生した！」[4] と自画自賛した。数年後、彼は、当時を思い出し、以下の様に流行に至る原因を分析している。

> 2001 年上海 APEC 会議に参加した 20 名の国内外の政府首脳が唐服を着用して後、国内外のメディアは、次々と続け様に、唐服が、濃厚な中華民族の凝集力と親和力を体現していることを賞賛した。唐服は、またたく間に、中華の大地で人気を博し、新世紀における中華人男性の服装経典の代表となった。この時、唐服は、既に、一般的な意義の上での伝統的な服装ではなく、スタイル、生地、縫製及び身なりにおいて、新世紀のトレンディー精神溢れる経典服装となったのである。（中略）唐服は、完全に、新世紀の中国人男性の伝統を代表する服装としての任に堪えることができる。特に、漢民族男子の伝統を代表する服装なのである。[5]

2002 年の春節後も、新唐服の販売スピードは落ちることなく、民衆の生活に浸透していく。礼服としてだけでなく、平服としても使われ、季節に応じたデザインも次々と生まれた。このブームは数年続いた後、徐々に冷めていった。だが、上海 APEC から 20 年経った今でも、新唐服は依然として、市場に出回っており、特に礼服、正装衣装として活躍している。

現代ファッション史上、度々ある衣装が大流行する事態を目にする。だが、13 億（約 92％が漢民族）の人口を持つ国が、年齢、性別、地域を問わず特定の衣装が大流行する事態は、あまり見かけない。APEC 新唐服デザイナーたちが外交部の要請に応じ、儀礼用の非売品をデザインしただけで、大ヒット商品を生み出し、数億、数十億の販売記録を作り出すとは誰も想像しなかった。中国語には次の様な詩がある。「有心栽花花不発、無心插柳柳成蔭」（期待を込めて植えた花は咲かず、適宜柳を植えたら日陰ができた）。正に前者は中山服、旗袍の境遇であり、幸運なことに新唐服は後者である。なぜ新唐服が奇跡的に国民的な流行へとつながったのか。

数か月以内で大流行へとつながったこの成功には、巧妙な戦略が仕組まれていたに違いない、と考えた人もいたようだが、事実は異なる。新唐服熱は、突如現われたのであり、その原因もはっきりしている。

第 1. 宣伝戦略が非常に簡潔明解である。新唐服の支持者たちは、只々「濃厚な民族の特色」「新しい華服」「我々の民族服」などと反復拡散し、同調性を生みだした。手段は簡潔明解だが、その

---

[3] 楊国強「新唐装・後記」。丁錫強他『新唐装』第 224 頁。
[4] 丁錫強他『新唐装』第 1 頁。
[5] 丁錫強『中華男装』第 367 ～ 368 頁。

規模は極めて大きい。宣伝の規模が大きければ大きいほど、大衆が受ける効果も大きくなる。テレビ、インターネット、新聞でも同様のことばが用いられ、催眠術にかけられたように、大衆は納得していった。

第 2. ことばによる宣伝以外、新唐服着用の模範例を示した効果は大きい。各テレビ局のキャスターが、どのような内容の番組であるかを問わず、皆、新唐服を着用したことが、大衆の手本になった。

第 3. アパレル産業の商業行為が大きな効果をもたらした。新唐服のメーカーは、絶え間なく新たなデザインを作り出し、テレビやインターネット上で大量に広告を打った。多くの店舗が積極的に仕入れ、新唐服の専用売り場さえも新設されていった。「当時、唐服は、一世を風靡していた。世論の推進力を除いて、最大の鍵を握ったのは、即ち、多くの服装関連企業が参加したことである」。[6] これ以外に、中国だからこそ起こり得る状況が更にこの流れを後押しした。一部の会社、学校、団体、政府機関などが、職員に新唐服を配ったことである。

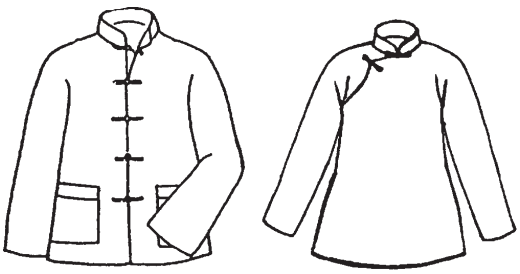
このような状況であるから、メディア、政府をバックに持ったファッション・デザイン業界、アパレル業界、販売店、一般大衆の全てが「唐服を、漢民族の民族衣装だ」と信じ込み、このことが、更なる好感を生み、熱烈な歓迎を受け、新唐服ブームを巻き起こした。

宣伝、模範、勧誘が効果を生み出したことは明らかである。だが、最大の原因は、大衆自らに宣伝や勧誘を受け入れる土壌が存在していたことである。ことばを変えるなら、目に見えない原因は、大衆が新唐服のような服装の出現を待ち望んでおり、宣伝と勧誘が、大衆の期待を満足させたことである。漢民族の民族衣装がまだ消滅していないと信じる肯定派は、表層心理で民族衣装を渇望した。理性では、民族衣装が消滅したという事実を認めても、感情では、民族の歴史に深い思いを寄せていた可能性がある。

現在、2001 年当時の大衆の服装意識を調査するのは不可能だが、結果から述べると、新唐服は、民衆のニーズに応え、新しい道を開いた。新唐服のデザイナーは、偶然にも漢民族の人々が潜在意識の奥深い所で眠っていた感情を呼び起こし、彼らの期待に応えた。このことが、成功へとつながったのだ。

では、大衆の潜在意識に眠っていた意識や要望とは、どのようなものであろうか。

新唐服は、元々存在した衣装ではなく、デザイナーが新たに考案したものである。「鮮明な民族の特色を兼ね備えた」と称賛されたが、新唐服は「交雑種」である。図 A・B と図 C・D を比較すると、構造上に明確な差異があることがわかる。



C 対襟短衫　　D 偏襟短衫

前者は、袖と胴体の間に縫い目があり、個々に袖と身ごろを作った後に縫い合わせている。それは、西洋式の「装袖」という縫製法である。立体的に見える効果がある。一方、後者は、肩と袖の間に

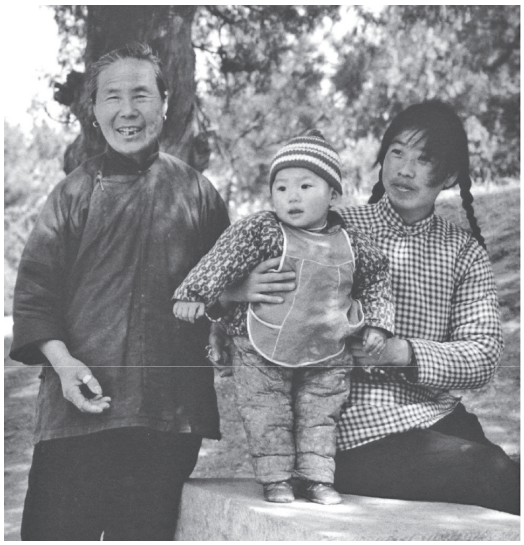
[6] 蒋玉秋他『漢服』第 2 頁。

縫い目がない。「連袖」と呼ばれる。袖と胴体が一体化しているため、肩のラインが崩れ下垂する。他にも、新唐服は、肩パットを入れ、ウエストラインを絞ったものや、背縫いがあるものもある。これらも西洋風の上着によく見られる特色である。このため、デザイナー自身も新唐服が西洋の上着と中国式上着の特色を兼ね備えていることを認めている。

もちろん「鮮明な民族の特色を兼ね備えた」ということばも言い過ぎではない。新唐服は、確かに漢民族の服装の特徴を有している。1. 立領対襟の形状、即ち、図 C のデザインである。立襟は、近代中国の伝統服の中でも典型的な襟の形の 1 つである。2. 鮮やかな色彩。APEC 用に作られた新唐服は、赤、青、緑、茶色、暗紅の 5 色であるが、後に販売された男装、女装用には、更に多くの色が使われた。漢民族は、鮮やかな色を好む傾向がある。3. 最も素朴な「一字釦」というボタンが使われている。4. 襟端と左右身頃の縁には、縁飾りの滾辺が使われている。5. APEC 唐服には、「織錦緞」が使われている。「織錦緞」は、中国特有の生地である。6. 安価な唐服は、刺繍は用いないが、高価なものは刺繍する。7. 唐服には、華人が好む梅、蘭、菊などの花卉や龍、鳳、鵲などの動物図柄が使われ、中華の雰囲気を醸し出している。このため、「装袖」や西洋式の裁断縫製方法が用いられているが、漢民族の人が見れば、新唐服は、民族特有の要素に満ち溢れているのだ。

これらの「民族的特色」の中で最も重要な要素は、「短衫」の形態にある。新たな「交雑種」が大勢の中国人から支持され、大流行につながった秘密は、漢民族の人々の深層心理にある衫襖の存在である。「短衫」は「襖」とも呼ばれ、薄いものを「衫」、裏が付いた厚いものを「襖」と呼ぶ。襟の形は 2 パターンあり、1 つは図 C の「対襟」であり、もう 1 つは、図 D の「偏襟」又は「大襟」である。

短衫の歴史は長く、少なくとも明代、宋代以前には遡れる。民国期に入り、上層階級の男性は、スーツ、長袍馬褂、中山服、学生服を、女性は文明新装、ワンピース、旗袍を着用した。だが、庶民（特に農民）は、ずっと変わることなく短衫を、そして、長褲（長ズボン）或いは短褲（半ズボン）を着続けている。民国期、街で短衫を着ている人に出くわしたなら、着用者は新教育を受けたことがない下層階級に属する人物であると断定できる。上層階級の人々は、家庭では、長褲や短衫を日常着としていた。特に冬場となれば、外側には中山服や人民服を着ていたが、その下には綿襖を着ていた。このような習慣は、1980 年代以降まで続いた。辺鄙な農村においては、21 世紀の今日でも、綿襖は、冬場の必需品である。清代末期から民国時代、庶民の短衫に変化はない。図 E の女の子



E 庶民一家三代 1966 年

は恐らく 1964 年前後生まれであり、2001 年、彼女はまだ 40 歳未満で、自分や家族が着ていた短衫の記憶は薄いが、潜在意識の中に存在する。若い母親は、2001 年まだ 70 歳位で、若い時の記憶が容易に蘇える。彼女たちとって、短衫こそが、自分が幼い時に慣れ親しんだ服装なのである。鄧小平夫人卓琳氏は、1978 年 10 月の訪日、昭和天皇や三木総理との会見時、また 1979 年 2 月の訪米、アメリカで観劇する際、対襟の襖を着用した。それは、対襟の襖を外交の場での民族服と認める意味がある。後述するが、80 年代以後、旗袍が女性の外交の場の民族服と指定されたが、70 年代末では対襟の襖が選択されていた。中山服、旗袍が漢民族の民族服であるということに違和感を覚えるという人がいるが、逆に考えれば、新唐服を目にしたとき、慣れ親しんだ感覚が生まれ、懐かしさがこみ上げてきたのかもしれない。角度を変えて言うなら、新唐服の基本的な構造は、漢民族の伝統的な服装である短衫に由来する。この形が漢民族の人々の心をつかんだ。この状況で、マスメディアが、民衆が慣れ親しんだ新唐服こそが漢民族の民族服である、とピーアールするのだから、大衆は共感し、容易に信じた。

ここで疑問を頂く方もいるであろう。それは、衫襖が長い歴史を持ち、純粋な「在来種」であると同時に、漢民族の人々によって広く着用されたのなら、なぜ衫襖が民族服と認められなかったのか、ということである。その答えは非常に簡単である。衫襖は、野暮ったくて地味で、時代遅れの感があるためだ。革命家、政府官僚、知識人は、衫襖の着用を好まなかったし、まして衫襖を礼服や正装着と見做すことはなかった。慣れ親しんだ短衫を家の中で着用するのは、着心地もよく相応しい。だが、正式な活動に参加したり、重要な式典に出席したり、外国訪問をする時には、相応しいとは言えない。現在、毛沢東や周恩来が農村を視察した写真を見ることができる。その時、彼らは中山服を着用して、農民は、短衫を着ている。彼らは人民革命の指導者であり、農民は指導される側の群衆であることが服装から一目瞭然である。仮に周恩来が短衫を着て、図 E の一家の傍らに立っていたなら、周氏がその子の祖父だと思い、政府高官であるとは誰も信じないだろう。つまり、中国人が求めていた民族服は、普通の伝統衣装というだけではない。見た目が鮮やかで、体裁が良く、現代的で進歩的なものでなければならなかった。新唐服はこれらの条件に符合したからこそ、新たな民族服として推挙され、社会の認知を得たのである。

だが、新唐服が大々的に賞賛される一方で、衣服自体が持つ「民族性」に疑問を投げかける人たちもいた。次に、彼らが投げかけた重大な疑問について検証する。

3. 厳しいルール作り

2003 年、新唐服熱がまだ冷めやらぬ時、突然「漢服復興運動」（略称「漢服運動」）がおこる[7]。この運動を簡略に述べると、「100％の民族服」を目指していた人々の中で、新唐服に対して、失望感や嫌悪感が生まれ、不満の声が沸き起こった。漢服ファンは、旗袍と同様に、新唐服の原型は満

[7] 詳細は、拙著『現代中国服飾とイデオロギー』第 48 ～ 54 頁。

州民族の服であり、西洋の要素も含まれていると指摘し、容認できないとした。彼女たちが求めているのは、正真正銘、純粋な漢民族の民族服であり、他国や他民族の要素、或いは何か新しいデザインが含まれているものではない。「100％の民族服」が現時点で既に存在しないなら、古代の漢民族の民族衣装を復興することが、唯一の選択肢である。これこそが、漢服運動参加者の動機である。目標達成のために、満清軍が入関する前の漢民族王朝の時代、即ち漢代、唐代、宋代、明代の漢民族の伝統衣装を手本にしないといけない。

彼女たちは、同じような興味と信念に基づいた愛好者と結びつき、グループとなり、ネットを通して相互に交流し、漢服復興運動を発展させた。各同好会には、正式なつながりはなく、主にネットを通して、相互に情報を共有している。漢服クラブの活動内容は、まず、漢服の知識を学習することに始まり、その後学習した内容から、古代服飾を模倣した衣装の着用に活動を移すのである。彼女たちが実践する上でマニュアルとなる広告宣伝資料は、インターネット上で公開されている。公開資料はどれも内容がほぼ一致しており、長さも短い。比較的長いパワーポイントであっても 40 スライド、文字にして数えるなら、一万字を超えるものは見あたらない。彼女たちは、非常に簡素な資料を頼りに、漢服の由来や特色を理解し、漢服運動を展開する意義を強調し、漢服の基準を定めていく。

古代の服飾を精確に復元するには、古代服飾史に関する詳しい知識が不可欠である。だが、漢服ファンのマニュアルとも思える宣伝資料から推察すると、彼女たちは、古代服飾史を十分に理解することなく、テレビの時代劇などから得た断片的でまとまりがない、不十分な学識だけを頼りに、自分たちの観念システムを構築したように見える。彼女たちが拠り所としているのは、歴史学的な知識、理論、ロジックではない。心の中にある熱情、願望、そして理想である。

漢服運動の宣伝資料は、まず例外なく漢服復興の必要性を強調する。彼女たちは、「漢民族は偉大な服飾の歴史を持っていたが、満州民族の暴政によって、その根を絶たれた。これからは、漢服を着用することで、漢民族の服飾文化を復興しよう！」というスローガンのような理念を金言として心の奥深くに刻んでいる。そして、このスローガンを論証するため、以下のように持論を展開する。

> 漢服は即ち漢族の民族の服飾である。黄帝が漢服を着用し天下を治めた。その伝統は、明代に至った。（中略）商周時代の早い時期には、漢服は完全な服飾体系を形成していた。（中略）漢服は、中華民族の燦爛とした文明史におけるきらめく星であり、ずっと人類文明史の空で綺麗な光を放ち、輝き続けている。1644 年満清軍が山海関に入り、「剃髪易服」を発令し、漢人に漢服を脱ぐことを強要した。祖先の服飾を守ろうとした数千万人が、野蛮な刃の下でその命を絶った。[8]

このような主張は、どの広告宣伝資料にも書かれており、漢服運動を推進する上での主旨にあた

[8] 瀋陽大学漢服クラブ杜若同袍会の学習・宣伝 PPT『漢服』第 2 ～ 3 スライド。

る。だが、この主張には、3 つの問題点が存在する。1. 黄帝は伝説上の人物であり、論ずるに足りない。夏王朝の古跡の発掘と研究は、ある程度の進展をとげている。だが学術界において、その歴史について知る所は多くない。商殷以前の服飾史については、ごく僅かな資料が残されているだけで、未だその詳細は明らかではない。漢服ファンは、中華文明史の開化が極端に早いように印象付けるため、随意に漢民族服飾史の開化を紀元前 13 世紀の商殷時代から、紀元前 20 世紀まで早めた。上述の数十文字の中からでも、漢服ファンが歴史を忠実に語るのではなく、誇張する傾向があることが見て取れる。

2. 祖先の服飾の伝統を守るために、清政府の服飾制度に反抗し、多くの漢民族の人々が虐殺されたのは事実であり、疑う余地がない。だが、「漢人が漢服を脱ぐことを強要され」という表現は、一見正しいように見えるが、実は正しくない部分が含まれている。清政府は漢民族の女性に服飾を変えることを要求していない。また庶民の衣服はあまりにも簡素で、服制の影響が小さい。髪型は、漢民族男性全員が影響を受けたが、衣服で大きな影響を受けたのは、上層階級と中層階級の漢民族成人男性のみであった。

3.「数千万人」が「命を絶つ」[9] ということばも誇張されている。当時は人口統計がずさんで、正しいデータは存在していなかったが、漢民族人口は約 1 億あまりだったと言われている。「剃髪」に反対したのは、男性である。仮に 370 年前、「数千万人」の成人男性が死亡したなら、漢民族は絶滅し、現在の中国大陸には、満州民族しか存在しないはずである。このような表現から、根拠のない誇張した表現を用い、自分たちの主張を強調していることがわかる。前述した中華の伝統を愛するよう鼓舞することが、大衆の感情を利用するものであるなら、満州民族が強制的に断髪易服を行い、その間に数千万人もの漢民族が命を落としたとする主張は、恨みの感情を利用したものだと言える。この話をすれば、彼女たちは直ちに冷静さを失い、頭に血が上る。満洲民族への恨みと敵意が、ことばに溢れ出す。これは、満州民族の服飾への敵意の増長を目的とし、歴史的な事実に目をそむけ、読み手の感情を利用し、宣伝効果だけを追求したものである。

F-1 交領斉腰襦裙

F-2 漢代文物

他にも、すべての宣伝資料において、旗袍と新唐服を満州民族の服装リストに入れ、排除の対象としている。旗袍が、満洲民族由来の古典旗袍の要素を持つことは、まぎれもない事実である。だが、新唐服の源が馬褂にあるという説は、知識不足によるものだと言わざるを得ない。APEC 新唐服に用いられた生地や花を描いた丸い図案と馬褂には、共通点がある。だがこれは局部の類似点に過ぎない。前述の通り、新唐服の基本的な構造は、短衫にある。よっ

[9] 他の PPT には、より誇張した表現も見られる。瀋陽大学漢服クラブ杜若同袍会の学習・宣伝 PPT『華夏有衣　襟帯天地』第 16 スライド。このスライドでは、「半分以上の漢民族の人」が断髪易服の闘争で命を絶ったと書かれている。

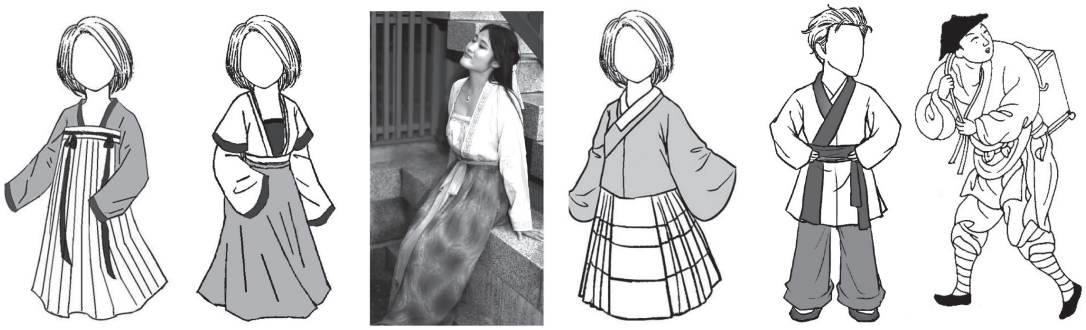
て新唐服は、漢民族の伝統衣装由来の要素が、満洲民族のものより、はるかに大きい。だが漢服ファンは、新唐服の源が敵対する満州民族の衣装であると誤解した。

漢服運動の宣伝資料には、歴史認識に対する誤認が多い。内容は論理性に欠けるが、宣伝効果は絶大であった。満州民族への敵意と恨みを煽った結果、旗袍と新唐服を「民族服」の範疇から排除しやすくなり、漢服復興運動の正当性が保たれた。漢服ファンは、これらのマニュアルから得た漢服に関する基本概念を共有し、実践し、漢服の具体像を築き上げた。

彼女たちは、約 10 種類の服装を、漢服の模範としており、これらのデザインに関する説明が、漢服のマニュアルのような存在になっている。漢服運動の宣伝資料には、服装の写真や可愛いキャラクターが頻繁に使われ、時には古代の実物写真も引用されている。実際の漢服ファンが衣装を着用した姿は、生き生きしており、彼女たちの表情、衣装のデザイン、更には周囲の雰囲気までをも表し、漢服運動を理解するには、非常に良い材料である。漢服ファンが作成したキャラクターも面白く、彼女たちの気持ちをよく伝えている。文物写真も古代のものを忠実に再現した貴重な資料である。これら 3 種類の画像の使用により、漢服宣伝資料は、彼女たちの推奨しているものを効率よく、わかりやすく紹介している。これら 3 種類の画像を拙論でも多数引用したいのだが、キャラクターと古代文物写真に関する著作権の使用許可が取れないため、引用を断念する。漢服ファンの写真も大量に入手したが、肖像権があり使用可能なものは少ない。よって、本論では、自作のイメージ図、平面図、古代文物の線画、許可を得た漢服ファン本人の写真を用い、漢服ファンが推奨する漢服を説明する。

図 F-1 は「交領斉腰襦裙」の着用イメージで、F-2 は古代文物の線画である。「交領」とは交差する襟、「斉腰」とは、帯で裙を腰のところで締めたスタイル。「襦」はシャツ、「裙」はスカートのことだが、現在のスカートとの相違点は、必ず裙の下に長いパンツを穿かなければならない。つまり、「交領斉腰襦裙」とは、裙の中に締める交襟のシャツに、下は、腰のところで締める長いスカート、男女兼用である。古代上着の袖は、変化形が多い。基本的な袖の形は幅広で、長さも長い。図 F-1 は普通の広さだが、図 F-2 は、ラッパ形になっている。両方の裙とも、普通のタイプである。

図 G は、「斉胸対襟襦裙」というタイプで、図 F の仲間である。異なるのは、シャツの形態である。前者は偏襟だが、後者は対襟である。他に、裙を締める高さも異なる。後者の方は、胸のあた



G 斉胸対襟襦裙　H-1 斉腰対襟半臂襦裙　H-2 漢服ファン　I 襖裙　J-1 短褐　J-2 明代文物

りで締める。この裙は、多くの裙褶に見られる形である。

図 H は、「斉腰対襟半臂襦裙」である。「半臂」とはシャツの外側に着る半袖の上着のこと、まず長袖のシャツを着て、その上に「半臂」を着る。「半臂」は、服装の本体ではなく、「補助服」であり、単独では着用しない。男性も「半臂」を着用する。H-2 は、H-1 同様、服の本体は同じだが、「半臂」の着用の有無が異なり、腰の帯が長い。このタイプは、女性が性的に開放されていた唐代のみ流行した。胸の一部が見えるため、保守的な宋代以降は、見られなくなった。だが、女性美をアピールするデザインであるため、21 世紀の漢服ファンには、とても人気が高い。

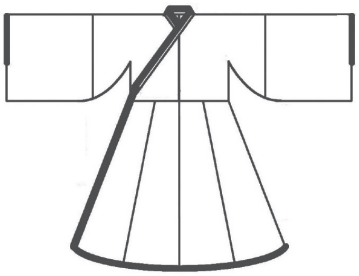
図 I は、「襖裙」というタイプである。下は同じ裙であるが、上は、単衣のシャツではなく、複数層に重ねた上着である。シャツの下の端が裙を締める位置を超える。図 I の裙は、「馬面裙」というデザインである。中央部分だけ広いが、両側のひだの幅は狭い。

図 J の「短褐」とは、粗布で作られた上着である。庶民の日常着であるため、「短褐」ということばは、庶民を指す代名詞としても用いる。上流階級、中流階級の人々も、家では「短褐」を普段着とするが、基本的には貧しい人々の服装である。中国古代服装史において、「短褐」は最も長く変化せず、その形を保ってきた。前出の図 C、D、E は、「短褐」の仲間である。漢服ファンは、古代の皇族、貴族、上流階級の生き方を羨望しお洒落な漢服に夢中になっている。これは、漢服ファンの集団心理の一面である。仮に「短褐」の本質を理解したなら、敬遠した可能性が高いが、何か行き違いがあったのだろう。「短褐」を着用する漢服ファンもいる。本来「短褐」はとても地味で、デザイン性がゼロに近い。だが、漢服ファンが着用する「短褐」は、デザインも施され、お洒落なものばかりである。

上述の 5 種は、いずれも上下二部式に属する。上下二部式は、変化を生み出しやすいデザインである。上着の変化、裙の変化、袖の形、幅や長さの変化、色彩、生地、模様、半臂の使用の有無、披帛の使用の有無など、これらすべてが変化可能な要素である。これらの多様な要素を組み合わせていけば、数多のパターンが生まれる。

中国古代の服装は、上下二部式と上下一部式の 2 種類に分けることができる。以下の数種類は、上下一部式である。

K-1 直裾深衣



K-2 平面図

図 K は、上下一部式の「直裾深衣」、上下一部式であるが、袍服とは異なり、最初から連結しているわけではない。同じ生地で上下を別々に作り、その後一体化する。帯を締めると、一体化した痕跡が隠れ、見えなくなり、袍服のような印象を与える。右の裾（図 K-2 の太い直線の部分）が直線なので、「直裾」と呼ばれる。「深衣」は漢民族の上下一部式の代表であり、男女ともに着用する。

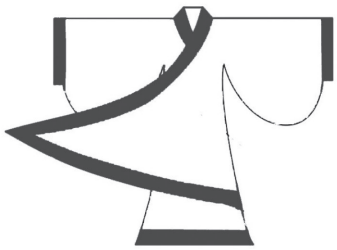
図 L-1 の「曲裾深衣」は、図 K-1 の仲間、

異なるのは、裾が直線ではなく、曲線である。服の前身頃が非常に幅広く、その裾が曲線になる。着用する時、裾の三角形の先端を左から右へ、腰に回して後、帯で締める。L-3 の腰の左の黒い三角が、裾の先端である。「曲裾深衣」は 2 種類ある。図 L-2 は丈が長いタイプであるが、図 L-1 の灰色部分は短いタイプの深衣である。このため、着用しても白い裙が見える。

図 M は、「道袍」と呼ばれるが、道士専用の服装ではない。着物のような、上下一部式の一体化した袍服である。深衣と異なり、初めから、一部式の袍服を作る。両側に切れ目がある。男性用である。

図 N は、襟が丸いため、「圓領袍」と呼ばれる。古代の袍服の襟は、開襟（襟が開く）が主流である。だが、襟に切り目がない丸い襟もある。唐代、圓領袍が流行した。圓領袍は、男性に多用するが、女性にも用いる。腰の下、両側に切り込みがある。

L-1 曲裾深衣


L-2 平面図：裾を締める前

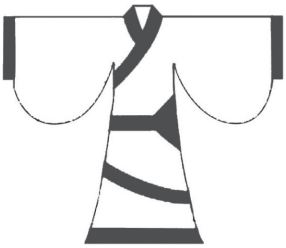

L-3 平面図：裾を締めた後

図 O-1 の白い部分は、「背子（褙子）」である。脇の下には切り込みがあり、中央を閉じない丈の短い袍服である。だが、図 O-2 のような長いものもある。現代のコートのように、外側に着る「補助服」であるため、単独で着用することはない。古代の実例からみると、女性が「背子」を着ることが多いが、男性も着用する。

服装以外に、帽子、靴、帯、披帛、各種の飾りも紹介され、推奨されている。紙面に限りがあるため、これらについては省略する。

M 道袍

N 圓領袍

O-1 背子

O-2 宋代文物

以上 10 種類が、漢服運動の広告資料において推奨されている漢服のデザインである。10 種以外に 1、2 種類を加えている資料もあるが、ほとんどが説明を加えた 10 種類に限定している。だが、古代の服飾は、デザイン上彼女たちが推奨する 10 種類程度しかないのであろうか。

これはある種のロジックの問題である。彼女たちの資料において、「漢服とは何か」という質問に対する答えは、概ね、上述の 10 種類のデザインに限定できる。「固有名詞は、普通名詞である」

は成立するが、「普通名詞は、固有名詞である」は成立しない。例えば、「大東文化大学は、大学だ」は可能だが、「大学は、大東文化大学だ」は成立しない。古代の服飾を定義する時も、同様のルールに従う必要がある。だが、漢服ファンの論述法は、後者に属する。上述の 10 種類の源は、漢代、唐代、宋代、或いは明代であり、確実に古代の漢服である。だが、漢代、漢服の基本的なデザインが形成された後、漢民族が中原を統治した時期は 1500 年以上にわたる。15 世紀もの長い年月において、僅か 10 種類の服飾だけが受け継がれたのであろうか。答えは否である。古代中国の服飾史の専門書にざっと目を通しただけでも、漢民族の服飾史が非常に豊富であることがわかる。よって「漢服はこの 10 種類である」という文句を宣伝に用いることは、古代服飾史への見識がない人に、漢服は、凡そこの 10 種類であるという間違ったメッセージを与えかねない。なぜ彼女たちは、この 10 種類にこだわるのか。同好会に参加し、共に古代服飾史について学習するのだが、内容は、歴史の真相を把握するための探求ではなく、自分たちの好む衣装を見つけるためのものだと言わざるを得ない。数種のわかりやすく、模倣しやすい綺麗な古代服が見つかれば、目的が達成する。言い換えれば、彼女たちは、最初から漢服の系統だった復興を目指していたのではなく、目に止まった何種類かの漢服をピックアップし、満足したのだと言わざるを得ない。だが、宣伝戦略として、短いわかりやすいキャッチフレーズを用いること、数種類に限定する手法は、大きな効果を生み出しやすい。このためか、2003 年に始まった漢服運動は、現在に至るまで、この 10 種類を強調する局面から、抜け出せていない。

漢服運動の宣伝用資料には、文字による説明もある。「漢服は何ですか」の疑問に答える時、全ての資料に例外なく、漢服の特徴として、「交領右衽、上衣下裳、長袖寛衣、系帯暗釦」と書かれている。漢服ファンはこれらの 16 文字を、まるで聖書のように漢服の特徴として捉え、信じている。だが、これら 4 センテンスは、正確な概括としては成立しない。この点は拙著『中国服飾とイデオロギー』において、詳述しているため、ここでは、重複を避け、前述の 10 種類に関するものから論拠を示す。「交領右衽」とは右前で交叉する襟のことである。だが「交領右衽」以外に、圓領袍、背子、対襟のシャツなどが存在する。「上衣下裳」とは、上下二部式のスタイルである。だが、深衣、袍服、圓領袍、背子は上下一部式である。「長袖寛衣」又は「褒衣博袖」とは、幅広の袖で、服装が全体的にゆったりしているものを指す。だが、「半臂」は袖が短く、図 O-2 の袖は広くない。「系帯暗釦」とは、ボタンを使わず、帯や紐だけで締めるスタイルだが、「背子」は、帯や紐で締めることはない。また宋代と明代の遺跡からは複数のボタンを使用した実物が発掘されている。

なぜ漢服ファンは、自らが作成した画像と矛盾する 16 文字の定義を尊奉しているのか。それは、16 文字の定義を、漢服を定義するセンテンスとして用いるのではなく、「非漢服」をあぶりだすための基準として使用したいためだ。具体例を示す。旗袍は、袍服であり「上衣下裳」ではない。ノースリーブや短い袖が多く、体にフィットするように作られているため、「長袖寛衣」でもない。更にボタンを使用しており、「系帯暗釦」でもない。次に、新唐服は対襟であり、「交領右衽」ではない。袖幅も一般的な幅であり、「長袖寛衣」でもない。中央にボタンが使われているため、「系帯暗釦」でもない。つまり、「交領右衽、上衣下裳、長袖寛衣、系帯暗釦」の 16 文字は、民族服から旗

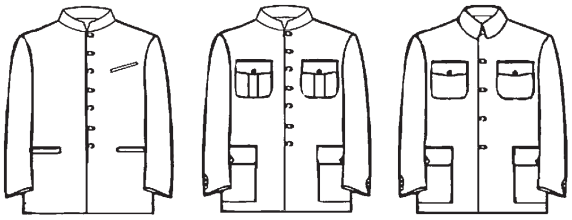
袍と新唐服を排除するために作られた基準なのである。更に、漢服の宣伝用資料は、旗袍、新唐服以外の「非漢服」或いは「偽漢服」を指摘し、排除するための役目も備えている。

漢服運動は単純なファッション運動ではない。中華民族文明を熱愛する愛国主義の情熱が基盤にある。満州民族やモンゴル民族への嫌悪と恨みを心の奥深くに秘めているため、漢服ファンはずっと感情が高ぶった心理状態の中にある。インターネット社会は、表面的には、人々の交流の範囲が無限に広がり、自由を獲得したかのように見える。だが、インターネット社会の発展の結末は、皮肉にも相反する「部落化」の局面を出現させた。インターネット利用者の中にいる「部落化」した者は、自分たちにとって心地よい発言をする利用者とだけ交流を重ね、益々、異論が耳に入らなくなってきている。興奮状態が高まり、部落民たちはお互いのみを信頼し、互いに依存度を高めている。ネットに依存する漢服ファンの集団も典型的な現代の部落集団だと言わざるを得ない。

彼女たちは 10 種類のスタイルを模範スタイルと定め、その他を「非漢服」或いは「偽漢服」として排斥し、古代に存在した数多のスタイルを敬遠する態度をとっている。その結果、一種の排他的な「法律」が作られ、10 種類あまりを「合法」とする一方で、その他を「非合法」としたのである。

まもなく漢服は、20 歳の誕生日を迎える。依然として、街中で漢服を着用する人はごくまれであるものの、確実に広がりを見せている。外国旅行中に、町の中心部において漢服姿を披露し、現地の人々の関心を集め、外国での卒業式に漢服姿で参加する人も出てきている。実際、大東文化大学の卒業式でも、漢服を多数目にする。漢服運動が拡大し、イデオロギーが異なる台湾でも漢服同好会が立ち上がり、漢服イベントが開催されている。漢服の美しさに魅了され、夢中になった純粋なファッション愛好者がいる一方で、漢民族の歴史、中華文化の復興を強調する漢服ファンもいる。後者は、漢服を着用し、中国の伝統的な典礼に参加することが、より重大な意義を持つと考えている。

4.「国服」「華服」で交わす



P 辛亥革命前後　Q 1920 年代初期　R 1920 年代後期

1990 年代の「民族服論争」は引き分けに終わり、中山服派と旗袍派は健在であったが、新たな課題に直面していた。新唐服と比べると、中山服の「民族性」は薄い。また、漢服と比べると、旗袍の「民族性」も乏しい。何が何でも「中山服が、中華民族の男性民族服だ」「旗袍が、中華民族の女性にふさわしい民族服だ」と主張する人々にとって、この課題をクリアしたいのが、本音である。中山服と旗袍の経過が異なるため、本論では、個々に検証を進める。

まず、中山服派の中には、中山服にも「民族性」があると強引に主張し続ける人がいる。図 P ～ R が示したように、中山服が、西洋の服装から変化したものだということは、一目瞭然である。だが、彼らは、学術的に中山服には、中華民族の DNA が含まれていると主張する。彼らは、孫文

が訪ねた黄隆生の伝説と中山服の雛形が企領文装にあるとする説を利用した。1902 年、孫文がベトナム滞在中、華僑である黄隆生を訪ね、上着をデザインしてもらったとする説である。この噂の信憑性については、黄氏がデザインしたものがどのようなものであるか、如何なる証拠も残されていないため、現在では検証することは不可能である。だが、中山服が企領文装を参考にして作られたと主張する論者たちは、この説に深い興味を示し、これを中山服が中華の特色を持つとする唯一の証拠とした。彼らのロジックは、東南アジアの華僑が、企領文装を愛用し、黄氏も東南アジアの華僑であるため、彼がデザインした上着は、必ずや企領文装と関係がある、とする。更に企領文装は華僑が愛用した服装であるのだから、この上着には中華民族の民族衣装の特色が含まれている、と主張するのである。この主張の代表例を引用する。

> 孫文自らは、日本の学生服と東南アジア華僑界に流行していた企領文装及び中国の服飾の歴史文化と服飾要素に基づき、彼が提唱した民族革命的思想と理念を繋げ、新しいタイプの中国式上着、即ち「中山服」を創造的にデザインした。[10]

「日本の学生服」のくだり以外は、推論だが、もとより彼らの目的は、歴史に則った主張ではない。彼らの目的は、中山服に「民族の特色」を持たせること、中山服に革命的、進歩的、民族的な要素を加えることが目的なのである。だが、この論拠が示されていない推論が中国学術界では、広く流布しており、多くの人々がこの脆弱な説を支持している。

冷静に考えれば、中山服を「民族服」とすることに無理があることがわかる。そこで、次になされた方策は、「民族服」の用語を避け、「国服」の概念を用いることである。「国服」とは、「中国の服」である。厳密に言えば、「中華人民共和国を代表する上着」という意味を持つ。西洋の服に源を持つ中山服を「民族服」とすることは難しくても、「国服」とすることには何の問題もない、と考えた。卓球はイングランド人の発明だが、卓球を中国の「国球」ということには何の問題もない。同様に、中山服の源が西洋であっても、中山服が中華人民共和国を代表する衣装であるということは、言い過ぎにはあたらない。

「国服」の用語が考え出されて後、次に成すべきは、大衆にこの概念を受け入れてもらうことである。「国球」「国花」「国服」、これらすべて抽象的な表現であり、何か正式な、精確な定義が存在する概念ではない。そこで、論者が用いた手法は、論理的な説明を加えることではなく、簡単なスローガン「中山服＝国服」を反復流布することであった。例えば、『中山装』の「序」に用いられている以下の様な表現である。

> 中山装を設計し、制作し、推奨し、広げたのも、辛亥革命の大きな出来事であった。（よって）

[10] 胡波等『中山装』第 61 頁。丁錫強も「「中山服の最初のデザインは、当時の華僑の間で流行していた「企領文装」（中略）」であった。」という。『中華男装』第 365 頁。

これを「国服の創作」と言うべきである。[11]

筆者は、拙著『現代中国服飾とイデオロギー』第 4 章において、孫文が 20 世紀初期より愛用した図 P が次第に同志の間で受け入れられ拡散し、1920 年代初期には、比較的大きな変化となって現れたこと、それが図 Q であること、その後図 R へと変化したこと、図 R が以後長期にわたって流行した中山服の基本形であるという歴史的事実を詳述している[12]。

図 P から図 R まで費やした 20 年あまりの年月は、自然発生的に発展し変化した緩慢な過程である。ある特定の 1 人やグループによって、デザインされ、それ以後変化することがなかったファッションではない。彼らは、中山服が最初から「国服」であったことを強調するために、「国服の創作」説を用い、国服が辛亥革命より存在したと暗示し、国服が意識的にデザインされたものであると印象づけた。インターネット時代に入り、スローガンを繰り返し拡散する手法や、一方的に結論だけを宣言する手法も大幅に増えている。だが、これらの手法が、大きな効果を生み出していることも事実である。そして、中山服の流布にも同様の方策が用いられている。ここにその一例をあげる。

> 中山服は、相変わらず、地位や栄誉に恥じないだけの値打ちがあり、世界が普遍的に認めた中国の国服なのである。[13]

この文章の前後には、論拠の提示がなく、説明や分析もない。定義のように定めた結論だけを明示している。この他にも、「1929 年、国民党が南京を首都にし、民国中央政府は、再度通令を公布し、中山服を国服と定め、さらに、憲法で文官が着任宣誓時に、中山服を着用しないといけないと定めた。」[14] とする説がある。だが、これも歴史をゆがめた解釈である。中華民国では「国歌」「国旗」は、法律により定められたが、当時「国服」という正式な認定はなされていない。胡氏たちが自らの説明に憲法の語句を取り上げたことは、歴史を深く理解していない読者たちに、中華民国には 1920 年代末には既に憲法があったかのような誤解を与える。中華民国憲法が成立したのは 1946 年である。胡氏たちの目的は、憲法の権威を利用し、自己の主張を正当化するものである、と言わざるを得ない。真実は、1912 年、1929 年のいずれにおいても「国服」の概念は存在していない。

論拠が示されていない説を主張すること以外に、中山服の宣伝には有名人が起用された。中山服の名称の由来を孫中山（孫文）に求めたことで、早期に中山服は孫文の代表的な服装となる。孫文を記念し、数多の中華民国の官僚や軍人が着用したこの種の衣装は、「中山服」の名称を得ることになる。蒋中正、毛沢東も中山服を愛用した。特に毛沢東は、殆ど中山服のみを着用している。このため、欧米人は、中山服を「毛スーツ」と呼んだ。世界には無数の服装がある。だが、政治家の

[11] 丘樹宏『中山装・序』。胡波他『中山装』第 2 頁。
[12] 拙著『現代中国服飾とイデオロギー』第 174 ～ 190 頁。
[13]『中山装』第 3 章「中山装的変遷」第 4 節。胡波他『中山装』第 114 頁。
[14]『中山装』第 3 章「中山装的変遷」第 2 節。胡波他『中山装』第 103 頁。

姓名を用いて衣服を命名することは、稀である。「中山服」と「毛スーツ」の名称は、近代中国史上、政治家の着装が、社会と大多数の民衆に大きな影響を与えるような事態が、経常的に発生することを表している。孫文、蒋中正、毛沢東以外にも、周恩来や鄧小平も中山服を着用した写真を残している。改革開放以後、スーツが常時正装として用いられるようになってからも、江沢民、胡錦涌たちは、閲兵式などの重要な場面においては、故意に中山服を着用した。最近では、2021 年 7 月 1 日、中国共産党百年建党式典において、習主席は、中山服を着用した。このような場面での中山服着用は、ある種の政治的、意識的なサインを大衆に伝達する役目がある。天安門上の習主席は、「中国人民は如何なる外国勢力の蔑み、迫害、奴隷制に対して、絶対に許すことはない。このような夢想を抱く外国勢力は、14 億あまりの中国人民が、自らの血肉にて作り上げた偉大な鉄の壁に（中略）頭を打ちつけることになるだろう」と述べた。仮に習氏がスーツを着用して、同じ内容のことばを放ったとしたら、些か違和感を覚える可能性が高い。

中国政府外交部は、中山服を男性の正装リストに入れている。外交員たちは外国の正式な活動において、スーツ或いは中山服を着用する。スーツを着用する時は、国際協力を重視し、国際慣例を遵守する意図が含まれている。中山服を着用する時は、中国の風格を強調する意図が含まれている。

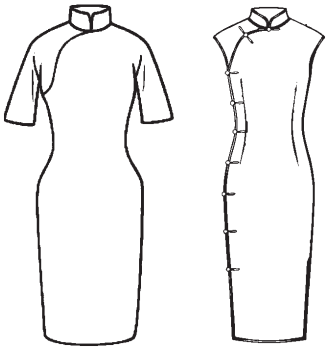
「今日、人々はマスメディアを通して、国家指導者が重要な会議に中山服を着用し参加する姿、芸能人たちが中山服を着用し国際性が強い授賞式に参加する姿、歌手たちがコンサートで中山服を着用する姿、オリンピック会場において、中山服を着用し大胆な一歩を踏み出す旗手の姿に度々出会う。」[15]21 世紀になり、中国の街中で中山服を身に付けた人に出会う機会は、あまりない。だが、我々は、国家指導者、外交官、芸能人、オリンピック大会の旗手たちが中山服を身に付けた姿を、テレビやインターネット上で目にする。メディアと一部の「論者」及びこの機に乗じて服飾の販売を促進したいと願うアパレル業界関係者は、「中山服が国服である」「華人の礼服である」ということを絶えず世の人々に思い出させ、ある種洗脳に近い重複と暗示の手法を用いて、宣伝の目的を達成していく。先ほど筆者が、習氏の名前をあげたことで、中山服に対する国服化の宣伝そのものが、中国政府主導によるものだ、と誤解する方がいる可能性があるので、ここで明確に申し上げる。国服化は、中国政府主導によるものではない。それは、組織だった動きではなく、鳥の群れの様に、相互に影響し合い、相互に干渉し合い、勢いが次第に大きくなったものだ。マスメディアと論者は、政治家、有名人を利用したのである。また、新唐服が流行した時と同じ様に、アパレル業界も中山服の「国服」を表向きの理由に据えて、生産と販売活動を促進したのである。

次に、旗袍の流布状況について分析を加える。孫文、毛沢東、周恩来が、経常的に中山服を着用したことにより、1970 年代、中国成年男子の大多数は人民服（中山服の変形デザイン）を着用した。このため中山服の正当性に疑問を抱く者は誰もいなかったが、旗袍はその運命が中山服とは全く異なる。1950 年代以後、旗袍の地位は急速に下落した。なぜなら旗袍は「労働人民の服装」とみなされなかったからである。文化大革命の時期には、旗袍は「四旧」のブラックリストに名を連ねた。

[15]『中山装』第 7 章「中山装的産業与文化」第 2 節。胡波他『中山装』第 251 頁。

このため完全に息の根を止められ、中国大陸において、街中で旗袍を着用する者はいなくなった。1980 年代以後、極左傾向が次第に緩和され消失していくに伴い、やっと慎重に旗袍を提唱する者が現れ、芸能界では旗袍の着用者も現れ、旗袍は長い冬眠から目覚める。

だが、旗袍も中山服同様、「漢民族の服飾ではない」という非難に直面する。仮に中山服を「外来種」と呼ぶなら、旗袍は「交雑種」ということになる。旗袍は三種類の服飾の要素が含まれている。第一は、満州民族の服飾の要素である。「旗袍」の「旗」は、旗人（満州民族）を指す。第二は、西洋の風格である。第三は、漢民族の要素である。図ＳとＴより、旗袍が袍服であり、その基本形が、満州民族の長袍（古典旗袍）から来ていることがわかる。身体にフィットし、着用者の体の線が外からはっきりとわかること、腿の部分の露出（甚だしい時は、太ももまでも露出する）と腕の露出（甚だしい時は、肩も露出する）、これらは、西洋の女権運動の影響を受けた結果である。中国の伝統的な服飾は、頭部と手を除いて、女性の体つきが他人からわかるような服装の着用を許していない。言い換えれば、旗袍の基本形は、満州民族と欧米から来ているが、細部においては非常に多くの漢民族の要素が組み込まれている。



S 1920 年代　　T 1930 年代

現代旗袍には、襟、ボタン、縁取り、生地、色、図案などに漢民族の伝統的な要素が自由自在に取り入れられている。このため、外国人は、容易に旗袍から「中華」の風格を感じ取るのである。現代旗袍に漢民族の伝統的な要素が含まれていることに疑いを抱く者は誰もいない。だが、これらの局部、細部の要素を頼りに、旗袍が漢民族の服飾に属すること、旗袍が「国服」であることを証明することは、不可能なミッションである。だが、旗袍支持派は、科学的な論証を避け、公に宣言すること、感情を巧みに操ることで、彼らの考えを大衆に植え付けようとした。

> 旗袍は、最も中国の特色を持つ伝統的な服装である。ある意味で言えば、旗袍が中国の国服と言える。[16]

> 旗袍は、中国における最も代表的且つ、最も民族風情に富んだ女性服の一つである。その曲線は完結で、色彩はきらびやかで美しく、風格は優雅で、高貴で落ち着いており、中国女性の独特な趣を表現している。[17]

[16] 徐麗『中国旗袍 200 例』第 1 頁。袁仄も「1929 年の服制条例によって、旗袍が女性の礼服として定められたことにより、旗袍が国服として認められた！」と論じる。『百年衣裳』第 124 頁。
[17] 江南等編著『旗袍』第 2 頁。

中山服の支持者たち同様、彼らも論証を加えず、証拠を示すことなく、旗袍が中国の伝統衣装であり、中国の国服であると宣言する。だが、旗袍と中山服は性質が異なるため、宣言する手法には、異なる方策が必要である。旗袍派は、第 1 に、「華服」[18] の概念を用いて、民族服の範囲を拡大している。彼らのロジックは、中華民族は 56 民族の共同体であり、民族の「連合体」である。満州民族は、56 民族の 1 つであり、中華民族の一員である。旗袍が満州民族の要素を持つことが、旗袍が中華民族の民族服であることに影響するものではなく、中国の国服であることに影響するものでもない、とする。これは、明らかに概念のすり替えである。仮にこのロジックが成立するならば、各少数民族の民族服は、すべて中国の国服となり得ることになる。第 2 に、彼らは抒情的に表現する手法を取り入れている。例えば、上記で引用した表現は、多くの形容詞で人を感動させる。彼らは読者からの感情の共鳴を得ることで、中国人女性が旗袍を着用したならば美しいのだから、旗袍が中国に属し、漢民族に属し、国服に属するということを信じ込ませようとしている。旗袍は非常に綺麗で、中国人女性は旗袍が大好きで、旗袍は中国人女性に相応しいのだから、旗袍は中国人女性の民族服である、[19] という論法で訴える。抒情は、文学の手法であり、学術とは無関係である。だが、抒情を取り入れる宣伝手法は、往々にして強い影響力を持ち、ある種一定の効果をもたらすことがある。

政府要人、芸能人が中山服を着用したことで、中山服の宣伝効果は増強された。旗袍を支持するメディア、デザイナー、アパレル業界、販売業者は、同様にこの手法を重視している。中国華服会は中央政府の外郭団体であるため、その行動から、中国の主流イデオロギーの方向性がわかる。中国華服会は、2015 年 3 月に成立して後、何度も服装節、服装コンテストを開催した。華服会の HP 上の服装紹介、活動紹介では、旗袍の図、絵、写真が、服装全体の 7 割以上を占める。このことから、華服会が最も重視している服装が旗袍であることが見て取れる。

上述の努力の結果、「中山服＝国服」は、多数の中国人に先入観として刻み込まれ、大勢の人が、「中山服＝国服」「旗袍＝華服」を前提として、疑う余地を持たなくなった。ここまで来ると、固定概念が既に形成され、先入観が刻み込まれ、洗脳が見事に成功したことになる。多くの中国人が、日本人の着物が日本の国服であり、桜が日本の花と感じるのと同様、中山服と旗袍が中国の国服である、と信じている。このレベルにまで達すると、誰かが中山服は「外来種」であるとか、旗袍が「交雑種」であるとか指摘したとしても、彼らは、中山服や旗袍が漢民族の民族服であること、中国の国服であること、華人の礼服であることに疑いを持たない。

だが、前述の通り、新唐服派、漢服ファンは、中山服と旗袍を民族服、国服と認めていない。また、民族服否定派は、20 世紀末既に、漢民族の民族服が絶滅した、と考えている。

---

[18] 拙著『現代中国服飾とイデオロギー』において、中国華服会の目的と宣伝戦略について詳述している。中国華服会（中国華服専業委員会）は「華服とは、漢民族が中心となり、56 民族で構成する中華民族の服装である」と定義する。詳細は、『現代中国服飾とイデオロギー』第 32 頁。

[19] 例えば、白雲は、「旗袍は、東方女性の身体美を最も十分に表す服装である。」と感情的なことばで称賛する。『中国老旗袍』第 1 頁。

5. まとめ

新唐服派、漢服派、中山服派、旗袍派、それぞれの持論は異なる。派閥間の関係は対立し、推奨する服装は全く異なるのであるが、彼らにはいくつかの共通点がある。

共通点として彼らは、漢民族に、民族服或いは、民族性のある衣装が存在して欲しいという願望が前提となっている。中国の急速な経済発展に伴い、大国意識が強まり、民族としての自尊心は膨張した。だが、世界のほとんどの民族が民族服を継承し、中国の 55 の少数民族も民族服を継承しているのだが、漢民族だけはできていない。この無念さが、一種の文化心理的なコンプレックスを育てた。

彼らは、ある意味理想主義者である。現在の中国の都市であれ、農村であれ、ほぼ全員が西洋の衣装、西洋の髪型や装飾を身に付けている。漢服、中山服、旗袍の着用者は、非常に稀な存在であり、伝統的な祝祭日を除けば、新唐服も同様である。現代中国の服飾がほぼ西洋化されていることは、誰の目にも明らかである。だが、彼らはこの服装西洋化の高波に立ち向かい、「在来種」である民族服の絶滅を認めていない。民族服の再起を切望し、劣勢を挽回するために奮起し、努力し続けている。

彼らは、感情に支配されている。彼らの民族衣装の空白から生まれたコンプレックス、民族衣装を所有する民族への羨望、民族衣装への期待は、ある意味理性とは無縁な心理状態の中に存在する。このため、現実を受けとめ、事実を基に物事を正しく判断することなく、自己の考えを信じ、主張して行く傾向が強い。

上述した 3 点の原点にある基本精神は、愛国主義である。愛国主義は、昨今の中国のイデオロギーの大きな柱の 1 つである。愛国主義は、民衆に無条件に祖国を愛すること、無条件に主流イデオロギーの主張を信じること、無条件に政府指導者に服従すること、必要とあれば、献身的に愛国活動を実践することを求める。中国において、愛国主義は宗教ではないが、宗教よりも更に強く精神を統治する力も持っている。

このような背景があるからこそ、持論を展開する時、彼らは大衆の感情に火をつけ、扇動するのである。「スローガンの反復」「抒情」の利用は便利な手法であり、証拠、ロジック、論証を重視する必要性が薄くなる。学術的な論証がなされる時もあるが、民族服の主張においては、宗教の布教活動に近い展開がなされることが多い。ただ、アパレルメーカーの活動は、販売を目的とする現実に則した行為である。

国や故郷や他人を愛することは、素晴らしい感情である。民族衣服の存在を切望し、それらを好むのは理解できる。自己が信じる民族服をピーアールする自由もある。だからこそ筆者は、何か理屈をつけずに、自分たちの主張をアピールすれば良いのではないか、と考える。また筆者は、彼らの努力を非難するつもりは全くない。だが歴史学の看板を掲げ、論証の無い情報を拡散させることは、学術研究をゆがめる行為であり、違和感を覚える。

筆者は、約 25 年前から、現代中国服飾に影響を与えるイデオロギーを分析している。人類歴史上、

自分たちの民族服が消滅した後、理想、宣伝活動に依存し、復興活動を持続させた民族は何処にもいない。だが、中国人はこの歴史を変え、少なくとも今日に至るまで、イデオロギーを利用し、彼らの信じる民族服、国服を発展させてきた。中山服、旗袍、新唐服、漢服の神話が作られ、「民族服」や「国服」の物語が展開された。同じ様な情熱があれば、今後も新しい物語が作りだされる可能性が高い。

挿絵出所

図 E：『北京 1966：フランス女性が見た文化大革命』第 4 頁

図 H-2：写真に写る本人からの提供。彼女は、北京のある大学の学生であった

図 F-2：河南省密県打虎亭漢墓壁画『中国服飾名物考』第 552 頁

図 J-2：明崇禎年間刻本「英雄譜『中国服飾名物考』第 630 頁

図 O-2：宋人「歌楽図」『中国服飾名物考』第 547 頁

参考文献（書籍・論文）

袁仄他著『百年衣裳―― 20 世紀中国服装流変』、北京、生活・読書・新知三聯書店、2010 年 11 月

江南、談雅麗編著『旗袍』、北京・当代中国出版社、2008 年 8 月

胡波主編『中山装――一個時代的生命符号』、広州、広東人民出版社、2008 年 11 月

蒋玉秋他著『漢服』、青島、青島出版社、2008 年 1 月

徐麗主編『中国旗袍 200 例』、北京・化学工業出版社、2016 年 6 月

丁錫強主編『新唐装』、上海、上海科学技術出版社、2002 年 10 月

丁錫強編著『中華男裝』、上海、学林出版社、2008 年 8 月

白雲著『中国老旗袍』、北京・光明日報出版社、2006 年 6 月

山内智恵美著「缺少民族服装的遺憾和反応」、『西北大学学報（哲学社会科学版）』1999 年第 1 期

山内智恵美著『20 世紀漢族服飾文化研究』、西安、西北大学出版社、2001 年 8 月

山内智恵美著『現代中国服飾とイデオロギー』、白帝社、2020 年 2 月

ソランジュ・ブラン撮影、下澤和義他編訳『北京 1966：フランス女性が見た文化大革命』、東京、勉誠出版、2012 年 12 月

参考文献（パワーポイント）

瀋陽大学漢服クラブ杜若同袍会の学習・宣伝 PPT「漢服」（計 11 スライド）

瀋陽大学漢服クラブ杜若同袍会の学習・宣伝 PPT「華夏有衣　襟帯天地」（計 24 スライド）

瀋陽大学漢服クラブ杜若同袍会の学習・宣伝 PPT「漢服文化介紹」（計 39 スライド）

瀋陽大学漢服クラブ杜若同袍会の学習・宣伝 PPT「漢服民族服飾」（計 30 スライド）